

令和8年9月15日
(2026年)

常任委員会行政視察報告書

委員会名	文教市民常任委員会
視察委員	委員長 井上真佐美 副委員長 林 恭広 委 員 後藤 恭平、後藤久美子、野田 泰弘、塩見みゆき、 有澤 由真、井口 直美
視察期間	令和8年8月18日（火）から8月19日（水）まで2日間
視察内容等	1 視察先及び調査事項 1日目 東京都大田区 産業交流拠点（HANEDA×PiO）の取組について 2日目 東京都文京区 文京区青少年プラザ（b-lab）の取組について 2 調査の概要及び意見（大田区） (1) 大田区の子な事業概要 羽田空港隣接の「羽田イノベーションシティ（HICity）」内に大田区が設置した新産業創造・発信拠点。大田区が培ってきた高度な集積型ものづくり技術（町工場等）と、国内外の先端産業、文化産業を融合させるオープンイノベーション空間である。高耐荷重、高天井を備えた研究開発用「テナントゾーン」、ピッチイベントや製品展示を行う交流空間「PiO PARK（ピオパーク）」、専門コーディネーターによるビジネスマッチングや、実証実験支援（HOIP等）などの機能を一体的に提供している。 (2) 主な質疑内容 ア 企業・大学・スタートアップの交流をどのように促進しているのか。また、ビジネス創出につながった具体的事例はあるか。 イ 地域の中小企業にはどのような効果や成果が生まれているか。 ウ スタートアップ支援はどのように行われているか。

	エ 行政としてどの段階まで関与しているか。行政と民間の役割分担や今後の課題は何か。 オ 定期借地50年という長期の民間事業者との契約において、運営上どのような工夫をしているか。 カ 多額の土地購入費用等について、回収見込みと着地点についてどのように考えているか。 (3) 委員会としての所感 ア 単なる箱物の提供にとどまらず、専門人材による伴走型マッチング体制を構築し、既存の地域産業資源（町工場等）と先進スタートアップを具体的につなぐ仕組みが極めて有効に機能していると実感した。 イ 行政が主導して公共施設や課題データをオープンにし、実証実験フィールドとして提供する姿勢が、スタートアップを引き寄せる大きな強みとなっており、本市における行政アセットの活用手法としても大変示唆に富むものである。 ウ 超長期の民間連携（PPP／PFI）スキームにおいて、地代収入や税収増だけでなく、地域経済や地元事業者への波及効果までを総合的な投資回収と捉える定量的視点は、今後の本市の産業振興や公有地利活用の検討において大いに参考にすべき点である。 (4) 各委員の所感 ア 大田区と吹田市では土地規模や空港隣接という立地条件が異なるものの、民間の実証を社会実装につなげる行政支援や、企業・大学・行政のあらゆる協業を生み出すコーディネート機能は、本市の産業振興や公民連携の参考になる。新たな箱を造るのではなく、既存の実証の仕組みを実装までつなぎ、大学や企業との共創・協業、行政課題とのマッチングを促す支援体制が重要と感じた。 イ 羽田空港跡地第1ゾーンの整備事業として建設された「新産業創造と発信拠点」HANEDA×PIOでは、区内に4,200ある町工場のネットワークづくりやものづくりに関する協業関係の構築のための取組が行われていて、具体的にはイベントやセミナー、自由に交流する場があることでそれぞれの企業の連携につながると感じた。社会課題（CO₂削減や介護、人材不足など）に官民学の連携での研究や開発が行われ興味深い視察とな
--	---

	った。 ウ 産官学が共創し、イノベーションを創出する拠点として、今後の更なる躍進が期待できるすばらしい施設の視察となった。本市でも、産官学それぞれの貴重な資産・資源は存在するものの、現状では物理的な距離やネットワークの分散という課題を抱えていると考えている。この状況を打開し、関係主体が緊密に連携して新たなイノベーションを生み出すための「場」の在り方や仕組みづくりについて、積極的に検討を進めていくべきであると感じた。
	3 調査の概要及び意見（文京区） (1) 文京区的主要事業概要 文京区青少年プラザb-l a b（ビーラボ）は、平成27年4月に開館した区内初の中高生専用施設であり、「何でも挑戦できる中高生の秘密基地」をコンセプトとして、放課後の新しい居場所づくりを進めている。施設は文京区教育センター内に設置され、談話スペース、ホール、音楽スタジオ、プレイヤード、研修室、自習室など多様な機能を備え、中高生が安心して過ごし、学び、挑戦できる環境を整えている。運営は認定NPO法人カタリバが受託し、行政と民間が連携した先進的な青少年支援モデルとなっている。 また、単なる居場所提供にとどまらず、中高生の主体性を育む多様なプログラムを展開している。年間200回以上のイベントを実施し、音楽・ダンス・スポーツ・料理・アートなど幅広い分野の体験機会を提供するほか、学習支援や探究学習、キャリア学習など教育的支援等も充実しており、主体性・協働性・社会性を育む実践的な学びの場となっている。 (2) 主要質疑内容 ア b-l a bの運営を認定NPO法人カタリバが担っている点について、行政と民間の役割分担、委託の範囲、評価・改善の仕組み等はどのようなになっているのか。 イ 若者が自ら企画・運営する「マイプロジェクト事業」の具体的な運営方法、スタッフの関わり方、企画の安全管理、成果の評価方法は。 ウ 区内中学校へ出張授業「出張b-l a b」の実施体制、学校側のニーズ、キャリア教育との位置付け、参加生徒の反応などについて。

エ SNS活用や中高生スタッフによる広報、フリーペーパー「Cha! Cha! Cha!」の制作体制、広報効果、利用者層の広がりについて。

オ 累計登録者数約1万6千人、延べ来館者数18万人、満足度93.9%という実績の背景、利用者の属性、利用頻度、満足度調査の方法などについて。

カ 地域人材によるレッスン提供や「b-lab AWARD」など地域住民向けイベントの実施状況、地域との協働の広がり、施設の安全管理、利用ルール、教育センターとの共用スペースの運用方法、今後の課題と展望について。

(3) 委員会としての所感

ア b-labは、都市部における中高生の「第三の居場所」として極めて先進的であり、単なる滞在空間ではなく、若者の主体性を育む仕掛けが随所に組み込まれている点が印象的であった。スタッフが若者の声を丁寧に受け止め、興味や関心を引き出し、挑戦へとつなげる伴走支援は、行政だけでは実現しにくい専門性を備えており、民間との協働の有効性を強く感じた。

イ 年間200回を超える多様なイベントや、若者自身が企画するマイプロジェクト事業は、単なる体験機会の提供にとどまらず、自己肯定感や社会性を育む実践的な学びの場となっている。学校連携や地域連携も積極的で、若者が地域社会とつながる機会を創出している点は、コミュニティの活性化にも寄与するものと評価できる。

ウ 吹田市においても、若者の居場所づくりや主体性支援は重要な政策課題であり、b-labの取組は大いに参考となる。行政・民間・地域が協働し、若者の挑戦を支える仕組みを構築することが、地域の未来を支える基盤となると改めて認識した。今後の施策検討に生かしていきたい。

(4) 各委員の所感

ア 楽器の貸出しや、音楽経験のあるスタッフ・中高生同士による教え合いで、外部講師に頼らず自然な交流が生まれていた。部活動に所属しない子供たちの居場所としての役割も感じた。教育センターとの共有部は時間帯を分けて有効活用。年間400本のイベントのうち約100本を子供たちが主体的に企画。利用校の偏りを踏まえ、西側にも新施設を計画中。設計段階から現役中高生の

	声を反映したことで、10年以上経過した現在も大きな見直しの必要性を感じていないという点が印象的だった。 イ 施設の整備前から中高生の意見・要望を聞き、それが反映された施設づくりが行われていた。運営面でもイベントの企画等、当事者が自主的に行っていること、日常的な利用に関する意見・要望を取り入れる仕組みをつくっていること、評価委員会等に利用者代表として高校生が加わっていることなど中高生が主人公の運営になっていることに感動した。事業を受託しているNPO法人の青少年育成の理念や向き合う姿勢が素晴らしいと感じた。 ウ 箱物（ハード）の建設で満足することなく、それを動かすための「運営コンセプト」を深く追求し、実践し続けている施設であると強く感じた。施設という器を造って終わりにせず、「中高生の自主性を育む」という軸をぶれさせずに運用上の工夫（ソフト面の施策やスタッフの関わり方）を日々アップデートしている。ハードとソフトが一体となって機能することの重要性を再認識させられる、非常に学びの多い視察となった。
--	---